


  
森のちやれんがニュース
   
2025 春

Newsletter vol.39



## 第24回企画テーマ展「楽器 見る・知る・考える—北海道博物館資料+柘谷隆男氏コレクション—」開催(2025年2月8日~4月6日)

本展は、2020年に臨時休館のためオンライン開催となった企画テーマ展をリメイクした展示会です。世界各地の多様な楽器とそれを伝えてきた文化や歴史について紹介しました。

会場では、当館が所蔵する楽器の数々を展示しました。楽器の姿かたちは、その種類や材質だけでなく、博物館に収められるまでの来歴や、現役で使われていた状況を今に伝えてくれています。

また、シカ笛研究の第一人者である柘谷隆男さんのコレクションを中心に、人の暮らしにかかわる音具も取り上げま

した。実用的な目的で音を出す道具を、楽器と区別して音具と言います。狩猟や儀礼など生活の中で使用された音具は、それをを用いた人びとにまで目を向ける機会を与えてくれます。

この他、音楽の授業で改良を重ねながら使われたリコーダーや、当館学芸員自作の楽器とその実演動画のコーナーもあり、楽器づくりの技術や知恵にも触れていただきました。奥深い「音の文化」を、さまざまな側面から考えることのできる展示会となりました。

(学芸員 谷口生貴斗)

### CONTENTS

- 1 収蔵資料紹介  
ある石の話  
—郷里と自身をつなぐもの—
- 2 総合展示紹介・第1テーマ  
縄文文化の土偶などの3Dモデル展示
- 3 研究活動紹介  
北海道を旅した芸術家たち  
解説案内スタッフレポート  
はっけん広場羊毛話
- 4 総合展示トピック  
文化観光事業による総合展示室の展示改修
- 5 アイヌ民族文化研究センターだより
- 6 北海道立アイヌ民族文化研究センターの20年(下)
- 7 活動ダイアリー  
2024年12月~2025年2月の記録
- 8

## 収蔵資料紹介

## ある石の話—郷里と自身とをつなぐもの—

谷口 生貴斗

研究部生活文化研究グループ 学芸員

約19万件の資料を所蔵する当館。その収蔵庫では時に思いがけない発見があります。写真の石を見つけたとき、私の頭の中は疑問符でいっぱいになりました。そのとき私は地学分野ではなく、生活分野の信仰に関する収蔵スペースを見ていたのです。いったい、この石はなんなのでしょう。

資料の記録票には、寄贈者や受入年月日とともに「移住の際、郷里の思い出として持参した石。」と記録されていました。しかし、それ以上の詳しい情報はわかりません。そこで、寄贈者を手がかりに、この石の来歴をたどることにしました。

資料受入時の報告書を調べると、寄贈者は新篠津村に住んでいた人物だとわかりました。さらに、新篠津村に関連する図書の中に、寄贈者とこの石に関する重要な情報を見つけたのです。

◇ ◇ ◇

江別町（当時）の医師、村上政雄は、明治時代に新篠津村袋達布<sup>ふくろたつぷ</sup>を開拓した父の足跡を後世に残すため、1950（昭和25）年に『ある開拓者』という本を出版しました。同書には、開拓の頃の

生活について、袋達布の古老たちへ聞き取りをおこなった内容も記録されています。この話者として寄贈者の名前がありました。寄贈者は明治中期に北陸地方で生まれ、その翌年に父母に連れられて袋達布へ移住したようです。同時期に袋達布へ移住した伯父家族について寄贈者が語った中に、この石に関する言及がありました。

手塚斧太郎（寄贈者の伯父）と其の父は、福井県三国から小樽まで、約一ヶ月もかかって来道した。（中略）三国から手土産に、小石を持って来てくれた。永いこと、大事にしてしまっていたが、何時の間にか、それが見えなくなっていた。何処へいったのかと思っていた。私が村上さん（村上政雄）の、小屋壊しの手伝いに行き、小屋の屋根の上に、ごろんとのっかっている石を見つけ、これおれの家のだから一と持帰ったのが此の石である。一だえん形、鶯卵大の、円滑な石を持って来て見せた。[村上1950]

ここで触れられた石は、その特徴から当館の収蔵資料と思われる。寄贈者の伯父が福井県三国（現在：坂井市）から渡道する際に手土産として持ってきた石であったこと、そして一度紛失していたこともわかりました。後に近隣の小屋の屋根上にあつた石を持ち帰ったとありますが、移住の際に持ってこられた石と同一であるのか、真相は彼のみが知るところです。

このエピソードからは、郷里から持ち伝えられた石に対して、特別な想いがあつたことが明らかです。生まれて間もなく北海道へ移住した寄贈者にとって、郷里とのつながり、そして袋達布へ移住し開拓を進めた父母や伯父たちと自身とのつながりを確認するためのものがこの石だったのかもしれない。だからこそ、一度紛失を経験したものの、再びそれを見つけ出そうとしたのではないのでしょうか。

移住者たちは、郷里をしのぶ様々なものを生み出しました。例えば、郷里から取り寄せた樹木を自宅の庭などに植え「望郷樹」とした事例が、道内各地で見られました[野田1980]。このように、移住者たちは郷里と自身とをつなぐ「心のよりどころ」を求めていたのです。

◇ ◇ ◇

この寄贈者は晩年、当時北海道開拓記念館資料調査協力員として当館の資料収集に寄与するとともに、この石以外にも多くの資料を当館に寄贈されました。現在、総合展示・第3テーマには寄贈者の修業証書が展示されています。

参考文献：野田正光 1980 『北限に生きる望郷樹』北海道新聞社。村上政雄 1950 『ある開拓者』富貴堂書房。

※引用箇所旧字体・旧仮名遣いは、新字体・現代仮名遣いに改めました。



移住者が持参した石（収蔵番号：001746）縦9.0cm×横10.4cm×高さ4.6cm

## 総合展示紹介・第1テーマ

## 縄文文化の土偶などの3Dモデル展示

鈴木 琢也・鈴木 あすみ

研究部歴史研究グループ 学芸主幹・博物館研究グループ 学芸員

総合展示・第1テーマの縄文文化の展示では、北海道を代表する土偶や動物形土製品、特殊な土器など（いずれも複製）を展示しています（写真1）。

これらの展示は来館者の皆さまに人気のコーナーとして親しまれ、展示に関する様々な要望や意見もいただいているところです。そのなかには、土偶などの正面だけではなく、背面や側面の文様・デザインを観察したいというものが多くありました。

この要望を受けて、研究プロジェクト「博物館におけるモノ・コト・ヒトの情報集積と公開活用に関する調査研究」の一環として、有効な展示手法の検討を進めてきました。そこで考えたのが、近年盛んに行われるようになってきた3Dモデルを活用した展示でした（写真2・3・4）。

この3Dモデルであれば、映像を回転させることで、普段見ることのできない背面や側面をぐるっと一周観察することができます。



写真1 土偶（複製）などの展示コーナー

3Dモデルの制作にあたっては、角度をかえた数多くの写真を撮影し、専用ソフトで編集するフォトグラメトリという手法を用いました（写真3）。そして、「（疑似）ホログラムディスプレイ」という装置を用いて、まるで実物が目の前で回転しているような姿を観察できるようにしました（写真2）。

また、これらの土偶などには凹凸による文様が施されていますが、色の情報を取り除いた単色モデルを制作することで、文様を観察しやすくする工夫もしました（写真4）。

今回は、中空土偶（国宝・函館市）、

動物形土製品（重要文化財・千歳市）の既存3Dモデルを利用するとともに、新たに4点の土偶や土器などの3Dモデルを制作して、総合展示・第1テーマの土偶（複製）などの展示コーナー（写真1）の近くに展示しました。これにより、実物と3Dモデルを見比べながら観察できるようになりました。

このような3Dモデルを用いた展示は、他の様々な博物館資料、特に立体的な資料の展示に有効だと思います。これからも活用方法を模索していきたいと考えています。



写真2 3Dモデル展示の様子



写真3 3Dモデル・中空土偶



写真4 3Dモデル（色なし）・中空土偶

## 研究活動紹介

## 北海道を旅した芸術家たち

田中 祐未

研究部歴史研究グループ 学芸員



1991年北海道生まれ。地図会社勤務（グラフィックデザイン担当）を経て、2018年12月より当館学芸員。専門は美術史。写真は、総合展示室内の「北海道鳥瞰図」複製写真を見ているところ。

北海道博物館では、2024（令和6）年2月10日から4月7日にかけて、企画テーマ展「森のちゃれんが宝箱—スタッフ一押しの収蔵資料や博物館活動を紹介します。展覧会、いや、展乱会!—」を開催しました。この展覧会は、北海道博物館（愛称：森のちゃれんが）のスタッフ一人ひとりが、なつかしのクローズアップ展示やおすすめの一品、博物館ならではの活動を紹介するという趣旨で企画されました。

美術史分野を担当する私は、収蔵資料のなかから『北海道国立公園観光旅行画卷』という作品を展示しました。

## 10人の画家たちによる「北海道国立公園観光旅行画卷」

昭和初期、日本では国内外から観光客を誘致する取り組みが進められていました。1930（昭和5）年、鉄道省に設けられた国際観光局は、日本画家をスケッチ旅行に招待する事業を創設初年から毎年実施しました。1936（昭和11）年の行き先は北海道。飛田周山や

荻生天泉ら10名が道内の景勝地をめぐりました。この巻物には、スケッチ旅行に参加した画家たちの作品が一つずつ収められています。

（写真1）は近藤浩一路（1884-1962）がえがいた場面です。画面左側の文章を読むと、層雲峡の名勝、大函において、旅行団の一員である永田春水が、三十四匹ものイワナを釣ったことが綴られています。画面中央付近、岩の先端にぽつんと立つ釣り人が、永田春水その人なのでしょう。人物がごく小さくえがかれることによって、向こう岸の柱状節理の大きさが効果的に表現されています。

（写真2）は小泉勝爾（1883-1945）

がえがいた場面で、画面左側の署名の隣に「雄阿寒ホテル階上より」と記されています。絵を見ると、高いところから見下ろす視点で溪流のようすがえがかれています。吊橋には浴衣姿の人物が二人いて、橋の上から溪流を眺めているように見えます。荒々しい川の流れと、穏やかな人びとのすがたが対照的です。さらにいえば、吊橋にいる人びとを眺める雄阿寒ホテル階上の小泉勝爾の視点は、この作品を鑑賞する人の視点であり、温泉宿でゆったりと景色を楽しむ時間を私たちも追体験することができます。

## 吉田初三郎による「北海道鳥瞰図」

国際観光局のスケッチ旅行と同じ頃、鳥瞰図作家として全国的に活躍していた吉田初三郎（1884-1955）も北海道に滞在していました。吉田初三郎は、北海道庁から注文を受けて、「北海道鳥瞰図」を制作するための現地取材に来ていたのです。（写真3）は、「北海道鳥瞰図」から登別温泉周辺を抜粋した図です。建物が並ぶ温泉街のすぐ奥に、登別温泉の名所である地獄谷や大湯沼がえがかれています。「登別」の



写真2 「北海道国立公園観光旅行画卷」1936年 小泉勝爾「雄阿寒ホテル階上より」



写真1 収蔵番号：096323 「北海道国立公園観光旅行画卷」1936年 近藤浩一路「層雲峡上流最奥之一名勝大函にて」



写真3 収蔵番号：041915 吉田初三郎「北海道鳥瞰図」 1936年 登別温泉周辺を抜粋

名称の左右に延びる赤い線は鉄道路線、温泉街に向かって延びるオレンジの線は道路で、温泉が好立地にあることが作品を見る人に直感的に伝わります。

#### 岡田紅陽による北海道景勝地の写真群

「富士こそわがいのち」として富士山の写真を多く残したことで知られる岡田紅陽（1895-1972）も、昭和初期に北海道を訪れた芸術家の一人です。

北海道博物館には、岡田紅陽が撮影した北海道景勝地写真286点が保管されています。写真が収められた木箱の一つには「阿寒 マシュー湖 昭和8年写 岡田紅陽」と記載されています。被写体は阿寒や摩周周辺のほかに洞爺湖、大雪山、大沼公園などがあります。「大沼公園九趣之内 緑蔭」「雪の神秘境 大沼公園」「大沼公園九趣之内 夕陽」など、異なる季節や時間帯で同じ地域を撮影した写真もあることから、紅陽が同じ場所に何度も足を運んだりシャッターチャンスを待ち構えたりしたことがうかがえます。

この写真群を取めた木箱の中には「北海道景勝地協会」と記載されたものもあります。北海道景勝地協会は北海道庁拓殖部内に設けられた組織です。この協会による出版物を探したところ、同協会発行の『北海道の風景 第五輯 洞爺・室蘭・登別』という絵

葉書に当館所蔵の（写真3）と同じ写真が使用されていることがわかりました\*1。また、同協会発行の書籍『北海道の国立公園と景勝地』（1936年）にも当館にある岡田紅陽の写真群と同じ写真がいくつか使用されています。これらは、紅陽の作品がどのように活用されたかを知ることができる資料といえます。



北海道を訪れた芸術家たちによってとらえられた北海道の風景の数々。これらを見比べるとそれぞれの表現の違いに気づきます。『北海道国立公園観光旅行画卷』における近藤浩一路や小泉勝爾の絵画は制作者自身の旅の体験

を切り取っており、鑑賞者がその体験に思いを巡らすことができます。吉田初三郎の北海道鳥瞰図は、観光施設と名勝の地理関係が視覚的に表現されています。岡田紅陽による登別の写真は、構図はもちろんのこと噴煙のかたちに至るまで、その風景が美しく見えるように撮影位置やタイミングが図られています。色彩という観点からみても、墨の濃淡による表現、墨を中心に使いながら淡い着色をほどこした表現、絵具をふんだんに使った鮮やかな色合い、モノクロ写真のはっきりとしたコントラストといった違いがあります。同じ地域を題材としても、それぞれの芸術家の目を通して見た世界は異なります。作品を見比べることによって、それぞれの表現のちがいが浮かび上がってくるのです。

これらの作品には、旅行者の体験、写真に写り込んだ地形や建物、描写された地理情報などが含まれ、当時の北海道のようすを知るための資料ともなり得ます。作品がどのような経緯で制作されたか、制作中はどのような状況であったか、作品完成後にどのようにして人びとの目に触れたか、といったことについて引き続き調査を進めていきたいと思います。

\*1 函館市中央図書館デジタル資料館で閲覧可。  
<https://archives.c.fun.ac.jp/postcards/pc002622/0001>



写真4 収蔵番号：114272 岡田紅陽「登別十五趣ノ内 大地獄ヨリ市街（温泉場）方面」

## 解説案内スタッフレポート

## 奈良美咲

学芸部道民サービスグループ 解説案内スタッフ

## はっけん広場羊毛話

毎年春になると羊から刈り取った羊毛の加工作業を行います。ここでは、羊毛がイベントや講座に参加される方に届くまでを紹介します。

はじめは、羊毛に付いた汚れやゴミを取り除く作業です（写真1）。皆さんは、羊さんの毛をじっくり観察したことはありますか？「白く、美しく」見えますが、実は大変汚れています。ここでは羊毛の毛に沿って、大胆かつ繊細に汚れを取り除いていきます（写真2）。この作業が終わると羊毛の洗濯です。ここでのポイントは、「優しく洗う」ということです。力を入れてゴシゴシ洗ってしまうと、羊毛がフェルト化していくので注意しながらの作業です。何度もお湯を替え、水が綺麗になってきたら洗剤で付け置きしま



写真1 最初の羊毛の汚れ取り

す。つけ置きをしている間のはっけん広場は、暖かなお日様のおかげで、なんともいえない香りに包まれます。つけ置きの作業が終わると、軽く濯いであら脱水をし、干して乾燥させます。羊毛専用物干し竿は、一般には売っていませんので、手造り干し竿に掛けて乾燥させます。数日経ち、しっかり乾いたら完了です。イベントの前には、羊毛をカーディング（ブラシをかける）してから参加者に使用できるように準



写真2 細かな汚れ取りの作業

備します。

はっけん広場にあるカーディングキットは、いつでも使うことができますので、体験してみたい方はぜひご参加ください。ここでは刈取られた羊毛が届いてから、さまざまなイベントで使えるようになるまでを紹介しました。この羊毛を使用したイベントや講座がたくさん開催されますので、是非参加してみてください。

## 総合展示トピック

 文化観光推進事業による  
 総合展示室の展示改修

2023年10月、当館は文化庁から「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光推進事業」の認定を受けました。この事業は、2020年に施行された「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律」（文化観光推進法）に基づき、文化観光拠点施設を中核として、地域の様々な文化資源を磨き上げることで文化についての理解を深める機会を充実させ、国内外からの来訪者の来訪を促進することで、文化の振興、観光の振興、地域の活性化の好循環を生み出していくことを目的としたものです。2025年1月時点で全国57地域が認定されています。当館では、5年間で、北海道開拓の村なども含む野幌森林公園エリアでさまざまな活動を行う計画です。ここでは、そのうち2023年度に総合展示のプロローグと第5テーマで実施した展示改修を紹介します。

プロローグは、総合展示の入口にある、展示コンセプトや北海道の地理的特徴を紹介するコーナーです。これまで来館者から、「恐竜や古生物の化石をもっと展示してほしい」、「北海道が今の形になる前の歴史を知りたい」という要望をいただいていた。そこで、北海道の地学的な歴史や資料を紹介するため、展示ケースを新設しました（写真1）。2024年度は、初展示となる鯨や植物の化石、恐竜絶滅の痕跡を記録した地層など、数か月に一度資料を入れ替えて展示しました。

第5テーマ「生き物たちの北海道」では、森・川・海などの環境ごとに「生き物のつながり」をつうじて北海道の生物の世界について楽しく知ることができます。今回は、それぞれの環境自体の特徴をやさしく解説したパネル（写真2）の新設や、森林環境の概要パネルに樹木名を加えるなどの改修

## 小野寺 努・水島 未記・圓谷 昂 史

総務部総括グループ 主幹・研究部自然研究グループ 学芸主幹・学芸主査

で、展示をより深く理解できるようにしました。

少しだけ新しくなった展示を、ぜひ見に来てください。



写真1 プロローグに新設した展示



写真2 5テーマの新設した展示

アイヌ民族文化研究センターだより

## 北海道立アイヌ民族文化研究センターの20年(下)

北海道博物館の前身の一つである、北海道立アイヌ民族文化研究センター。前号では、「1 設立まで」と「2 事業の立ち上げ」を通して、アイヌ民族文化研究センターの開設までを振り返りました。今回は、開設後の事業の歩みをたどります。

### 3 事業の展開(1)

#### 1994～2003年度

アイヌ民族文化研究センターが設置後まず取り組んだ事業の中で大きな位置を占めたものが、寄贈を受けた「山田秀三文庫」(アイヌ語地名研究者・山田秀三の旧蔵資料。1994年7月受贈)、「久保寺逸彦文庫」(アイヌ文学研究者・久保寺逸彦の旧蔵資料。1997年7月受贈)等の整理と保存、目録刊行でした。オープンリールテープやガラス乾板写真、数多くの筆録ノートやたくさんの書き込みのある地形図など、様々な状態の資料について、内容の記録をとりつつデジタル化等の保存処理を進め、2003年度までに計8冊の目録を刊行しました。



写真1 オープンリールテープの点検

また、北海道立図書館に所蔵されていた北海道教育委員会によるアイヌ文化に関する調査事業で作成された録音資料などについても、保存のためのデジタル化を進めました。

並行して、職員による調査・研究にも着手し、当初は職員が各地を訪れ、アイヌ語や物語、様々な生活体験などについて聞き取らせていただくことや、道内各地に残されている資料の調査や整理に取り組みました。

普及事業では、1994年が国連の定める「世界の先住民の国際10年」のスタートの年であったことから、これに関する道の取り組みの一環として、アイヌ文化を紹介するパンフレット(小冊子)を毎年1冊ずつ作成することとし、1995(平成7)年の「はなす(アイヌ語)」から2003(平成15)年の「地名」までの9巻を発行しています。

### 4 事業の展開(2)

#### 2004～2014年度

開設から10年を経たころから、調査・研究や資料の収集整理の成果をどのように提供していくか、ということにも事業の重点を置くようにしました。

特に、昔の録音や録画、筆録ノートや写真などを、関係する人々の様々な権利(プライバシーや公表権、著作権など)に配慮しつつ、どのように公開していくことが適切なのか、基本的な考え方やそれを具体化する制度や手続きの検討に時間を割き、2003(平成15)年度ごろから、順次、こうした資料の公開に着手しました。



写真2 資料の公開版

資料整理の成果を提供する方策の一つとして、2004(平成16)年度から展示会の開催にも取り組み、山田秀三文庫などを紹介する企画展を道内各地で開催しました。調査研究の成果を提供する方法としては、開設初年度から毎年『研究紀要』を発行していましたが、2004(平成16)年度から中・長期的な調査研究の成果をまとめた『調査研究報告書』の刊行を開始し、2010

(平成22)年までに6冊を刊行しました。

また、2001(平成13)年度に開設したウェブサイトを段階的に整備し、出版物のPDFファイルや連載記事の掲載、公開した録音資料の紹介などを進め、2012(平成24)年には、公開したアイヌ語資料を検索でき一部は試聴もできる「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ」を開設しています。



写真3 資料閲覧コーナー

### 5 北海道博物館への継承

この間、2008(平成20)年度に、中央区北1条西7丁目プレスト1・7ビルから、北3条西7丁目緑苑ビルに移転、また2010(平成22)年に道が北海道博物館基本計画を策定する中で、北海道開拓記念館との統合により北海道博物館の一翼となって、道立の総合博物館としての事業を担う中で、設置目的であるアイヌ民族文化の調査研究や資料・情報の収集と整理を進め、その成果の普及を図ることとなりました。

2015(平成27)年の北海道博物館発足以後、博物館の一部門であるアイヌ民族文化研究センターとして、様々な展示や普及行事の企画・実施を担ってきました。これからは、道立の資料保存利用機関として、資料を整理し、公開し利用を進めていく役割も改めて充実させていきたいと思えます。

(小川正人)

アイヌ民族文化研究センター長)

**活動ダイアリー**

# 2024年12月 ～2025年2月の記録

12月(土・日)

■はっけんイベント「稲わらで、お正月飾りを作ろう！」をはっけん広場で開催。

12月7日(土)

■連続講座「ちゃれんが古文書②」を開催。  
講師：三浦泰之・東俊佑

12月8日(日)

■ミュージアムカレッジ「お葬式に関する「コト」からみる移住者にとっての「葬式」」を開催。講師：尾曲香織

12月14日(土)

■特別イベント「植物化石から地質時代の環境を調べる」を開催。講師：成田敦史・圓谷昂史・久保見幸

12月18日(水)

■総合展示クローズアップ展示、プロローグ、1テーマ～5テーマの展示終了。

- ①『化石の日』関連展示「植物化石と石炭」
- ②新撰組の元幹部隊士永倉新八
- ③「開発」とアイヌのくらしー消えたサノイベの集落ー
- ④測量技師・川村カ子と駅員森竹市の活動
- ⑤乗る・引く・運ぶ、馬の道具
- ⑥バスに乗ってこう！
- ⑦植物に見る「ホロムイ」の謎

12月21日(土)

■ミュージアムカレッジ「イオマンテかイオマンテかアイヌ語の「わたり音」を再考する」を開催。講師：奥田統己

- 総合展示クローズアップ展示、プロローグ、1テーマ～5テーマの展示入替。
- ①北広島市で新たに発見されたクジラ化石
- ②国境の地域「樺太」
- ③「北海道立アイヌ民族文化研究センター」の21年～開設30周年から振り返る～
- ④北海道博物館が所蔵するトンコリ（五弦琴）
- ⑤いろいろな鋸 写真1
- ⑥建物を飾るガラス 写真2
- ⑦鳥の骨いろいろ

12月22日(日)

■ちゃれんがワークショップ「博物館で新年祈願！日本の画材で絵馬づくり」を開催。講師：田中祐未・三浦泰之・水島未記 写真3

1月(土・日・祝)

■はっけんイベント「今年の干支 ぐるぐるへビを作ろう！」をはっけん広場で開催。

1月13日(月・祝)

■第23回テーマ展「北海道のお葬式」の終了 写真4。

■「北海道のお葬式」ミュージアムトーク開催。

1月18日(土)

■特別イベント「博物館のウラ側を見てみよう～生物編～」を2回開催。講師：水島未記・博物館研究グループ

1月19日(日)

■ちゃれんがワークショップ「稲わらで、「鍋敷き」を作ってみよう！」を開催。講師：尾曲香織・表深太

1月25日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座①」を開催。講師：三浦泰之・東俊佑 写真5

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。



写真1



写真2



写真3

2月～3月(土・日・祝・振)

■はっけんイベント「羊毛ボールを作ろう！」をはっけん広場で開催。

2月1日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座②」を開催。講師：三浦泰之・東俊佑

2月8日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座③」を開催。講師：三浦泰之・東俊佑

2月8日(土)

■第24回テーマ展「楽器 見る・知る・考える」を開催（4月6日まで開催）。写真6

2月9日(日)

■子どもワークショップ「ヒツジの毛にふれてみよう！① 初めての草木染め」を2回開催。講師：会田理人

■特別イベント「はじめての「トンコリ」体験①」を開催。講師：甲地利恵

2月11日(火)

■「楽器 見る・知る・考える」ミュージアムトークを開催。

2月13日(木)

■総合展示クローズアップ展示、1テーマの展示終了。

- ①『蝦夷島奇観』写本から②：クマ祭
- ②国境の地域「樺太」

2月14日(金)

■総合展示クローズアップ展示、1テーマの展示入替。

- ①幕末におおける幕府高官の随行と接待
- ②新しく仲間入りした歴史史料たち

2月15日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座④」を開催。講師：三浦泰之・東俊佑



写真4

■特別イベント「はじめての「トンコリ」体験②」を開催。講師：甲地利恵

2月19日(日)

■子どもワークショップ「シカ笛をつくろう！」を開催。講師：表深太・甲地利恵

2月22日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座⑤」を開催。講師：三浦泰之・東俊佑

2月23日(日)～24日(月)

■「楽器 見る・知る・考える」ミュージアムトークを開催。



写真5



写真6

**来館者数**

○2024年12月～2025年2月  
 総合展示室 8,711人 特別展示室 6,366人 はっけん広場 1,596人  
 ○累計(2015年4月～2025年2月)  
 総合展示室 885,469人 特別展示室 610,008人 はっけん広場 133,968人

**森のちゃれんがニュース 第39号**

発行日：2025年3月27日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

 ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2025